

鈴木喜和氏博士学位請求論文 *Keats, Epic, and the Prophetic Solitude* 審査 要旨

主査：早稲田大学教授 西山 清 博士（学術）早大

副査：早稲田大学准教授 ラリー・L・ハンソン

元上野学園大学教授 伊木 和子

明星大学教授 笠原 順路

本論文は 19 世紀イギリス・ロマン派の詩人 John Keats（ジョン・キーツ、1795-1821）の叙事詩創作への営みの意義を、文化的・歴史的な文脈を踏まえて多角的に論じたものである。鈴木氏の渉猟した歴史的な文献は先行する研究書の類は言うに及ばず、当時出版されていた数多の定期刊行物、同時代の作家、批評家の著作、社会改革にかかわる小冊子や論評など、多岐にわたり、その数は膨大なものである。これらを鈴木氏は丹念に読み込み比較検討したばかりでなく、時には批判を加え誤謬を正す作業までおこない、その結果、生起消滅する批評の潮流に左右されることなく、できうる限り公平な態度で叙事詩人としてのキーツ像を描き出している。わが国で英語で書かれたキーツ研究書は筆者の知る限りではこれまで 5 冊あるが、鈴木氏の重厚な論文は国内で英語、日本語を問わず出版された数多の先行研究書の中でも最高水準に位置づけることができ、現今のキーツ研究において一頭地を抜くものである。

キーツは ‘Hyperion’ と、その翻案である ‘The Fall of Hyperion’ という二作の叙事詩を執筆しているが、両作品ともに途中で放擲され、断章として残された。ホメロス、ウェルギリウス、ダンテ、ミルトンなどの先例に見られるように、叙事詩というジャンルは伝統的に重厚長大という言葉がもっとも似つかわしく、主題に崇高性が求められるのはいうまでもなく、作品には相当程度の長さや高度な技巧が求められる。これに対し、キーツの叙事詩は技巧を措くとしても「ハイピリアン」が 884 行、「ハイピリアンの没落」にいたってはわずか 529 行の長さしかない。当時は啓蒙思想の潮流に乗り、断片としての芸術作品に独自の存在意義を認める文化背景が醸成されてきており、両作品を巡っても断片としての重要性と詩想の深みに関して、これまで多くの議論が費やされ、高い評価も与えられてきた。しかしながら、ひとえに作品そのものの短さゆえに、詩人の叙事詩創作の試みの

全容を解明するような浩瀚の研究書が世に送り出されたことは、過去になかった。その結果、叙事詩は詩人キーツに対して負の評価をもたらすことにもなったのだが、鈴木氏の論文はこの評価を逆転させ、むしろキーツこそが叙事詩の伝統に新しい生気を注ぐ、真の叙事詩人であったことを論証する試みである。

鈴木氏の論文は、近年、質量ともに充実が図られるようになってきた歴史的観点を基軸としている。しかし、1980年代後半から90年代に大きな展開を見せた新歴史主義が文学作品の政治性に焦点を定めていたのに対し、鈴木氏はその傾向に一定の理解を示しながらも作品をより大きな文化的潮流の中に解き放ち、作品の重層性を解読しようと努める。この手法により、叙事詩の文化的伝統の中で育まれた詩人らの精神風土にじつはキーツが通暁していたことを、鈴木氏は先行研究の網目から漏れていた新たな事実の発見をも含め、独自の語り口で克明に論証することになる。序章と本論全四章、そして終章からなる本論文の構成を以下に記す。

Introduction: Keats, Benjamin Robert Haydon, and ‘epic passion’

Chapter 1: ‘Retiring from the World’: Keats and the Culture of Solitude

A Flight with a Coy Muse: Hunt and Keats in the Retirement Tradition

The Representations of Solitude in Endymion

‘high-rife with old philosophy’: Keats, Milton, and ‘Ode to Psyche’

Chapter 2: Post-Waterloo Millennial Politics and ‘Hyperion’

‘they weave a paradise for a sect’: Poet-Fanatics

Robert Owen, or ‘The Practical Visionary’

The Paternal Sway of Legitimacy

The Press and the Gigantic Sense of the General Good

Richard Carlile, Deism, and the Cockney Criticism

‘a little Spirit of another sort’: The Poetic Reformation

Chapter 3: From ‘Hyperion’ to ‘The Fall of Hyperion’: Keats’s Poetics of Belatedness

‘Hyperion’: Or, a Vision of Personal Identity

Keats and 'modern poets'

Originality and Self in 'Ode to a Nightingale'

The Failure of Narration in 'Ode on a Grecian Urn'

'The Fall of Hyperion' and the Burden of the Narrative Style

Chapter 4: The Democracy of Reading and 'To Autumn'

Schooling, the Madras System, and the Lake Poets

'unity sublime': The Ideology of the Sunset in The Excursion

'To Autumn' and the Polyphony of Being

Epilogue: New Heroism

Bibliography

以下、順を追って内容とその評価を概説する。

序章： キーツはミルトンのように伝統的な叙事詩人の範疇には入らないものの、「ハイピリアン」創作の試みが詩人にとっての *annus mirabilis*（驚異の年・1819年）を導き、オードや 'The Eve of St. Agnes' などのような完成度の高い作品群を生みだした。その結果、彼は死後にシェイクスピアにも比肩する詩人という、高い評価を与えられることになるのだった。1818年に上梓した4000行を超える長編の物語詩 *Endymion* は、詩人として成功する夢を託した野心的な作品であったが、不幸にも定期刊行物からの酷評が、存命中から没後しばらくの間の詩人の評価をほぼ決定づけてしまった。作品の構成自体にはたしかに未熟なところがあり、しばしば私情に流されたような表現も見られる。しかし、たとえば *Blackwood's Edinburgh Magazine* に代表される当代の保守派の論評に横溢する偏見などは、師匠と仰ぐ左翼詩人でジャーナリストの Leigh Hunt 率いる Cockney School にキーツが名を連ねていたがゆえに生じたものであることも、また確かであった。

そのような偏見にもかかわらず、『エンディミオン』を執筆するあいだにキーツの詩想は急速に深まりを見せ、物語詩というジャンルを超えて叙事詩創作に意欲を燃やすようになる。詩人はすでに Clarke's Academy 時代に Virgil の *Aeneid* を翻訳していたように、叙

事詩に対する情熱は早くから持ち合わせていたのだが、いわゆる叙事詩的熱情がキーツの詩作生命を支える存在原理となるのは、やはり『エンディミオン』を執筆した頃であつたろう。この熱情を詩人は友人の歴史画家 Benjamin Robert Haydon と共有しており、鈴木氏はこの熱烈な絆をキーツは叙事詩創作への一大推進力としていたと見る。ヘイドンはこれまた歴史画のジャンルで画家としての名声を手中にする野心に駆られていたのだが、この当時は主題の重要性と作品の規模からも大作と呼ぶにふさわしい *Christ's Entry into Jerusalem* に取り組んでおり、キーツはヘイドンとの往復書簡の中でこの作品を叙事詩と呼んでいた。すなわち、みずからが依拠する芸術の原理原則を体現すべく全身全霊をかけるヘイドンの姿に、キーツは自己の理想とする芸術家像を見出し、「ハイピリアン」と『キリストのエルサレム入城』を並行的な創造行為と考えていたのである。これに留まらず、『キリストのエルサレム入城』には対ナポレオン戦争における軍事的英雄の功績に触発されたと思われる愛国心や、特異な千年王国の招来願望が込められていると鈴木氏は推定し、叙事詩的な性格を帯びたその絵画と「ハイピリアン」に、時代精神を探るための貴重な手掛かりを求める。

そのいっぽうで、キーツ自身はやがて狷介固陋なヘイドンに顕著な自己顕示欲、ないしは虚飾からは距離を置き、陽の当たる名声よりも「偉大な日蔭」を好み、孤独な預言者とも言う自己像を育むようになる。鈴木氏の言う自己像とは、孤独を愛する文学的伝統に連なるものである。この論点はこれまでの日本の研究ではほとんど言及されることはなかったものの、その出自はジョンソン博士が絶賛していた John Pomfret などに顕著な 17 世紀以来の隠遁文化である。そして、キーツの孤独な自己像は『エンディミオン』にも見られるものであったが、詩神の「深い預言者の孤独」として「ハイピリアンの没落」の各シーンに深く浸透していることが読み取れるのである。

第一章：本章では、文化現象という観点から孤独の諸相を観察し、それがキーツの想像力と詩想に反映されていることを確認し、孤独が詩人の叙事詩創作の基底をなす情緒に由来するものであったことが論証される。孤独愛好と田園への隠遁にかかわる議論は、キーツ自身の詩想、詩作の発展に沿っておこなわれる。

第一節では Wordsworth 的自然観が窺われるソネット ‘O Solitude!’ が取り上げられ、この作品の背景を精査することにより、キーツとハントがともに隠者文藝の伝統と深いかわりをもっていたことが確認される。ハントは孤独な逍遥を好みながらも都会の文化活

動を必要としていたため、都市と田園の両義が交錯する「郊外型」の生活様式をロンドン北郊のハムステッドで実践していたが、これは中庸を得た中産階級的な隠遁の思想の具現化であると鈴木氏は指摘する。より正確に言えば、実際に中産階級による郊外化の波がハムステッドに押し寄せるのは 1830 年代以降のことであり、むしろハントはヴィクトリア朝期の中産階級の生活様式をすでに先取りしていた詩人であったと考えられる。キーツがハントの一連の「ハムステッド・ソネット」やエッセイに影響されていたことは明瞭なので、このことに対する言及と、「孤独よ！」の直後に書かれたハント的ソネット ‘To one who has been long in city pent’ に対する分析もここで欲しかった。

第二節と三節では、ハントの射程を超えたキーツの孤独の探究が『エンディミオン』の物語と書簡をもとに再現され、羊飼いやエンディミオンと月姫シンシアとの愛の神話として出発したはずの物語のプロットに、最終的には牧歌的幸福と孤独な隠遁者の生の融和に収斂する底意を読み取ることになる。鈴木氏の正確なテキストの読みや、書簡の引用の的確さ、あるいは関連作家の作品や各評家の見解のバランスのとれた配置などは、この論文全体について言えることであるが、とりわけここでは二つの言説が注目される。それは、キーツの孤独探究が同時代の文藝に共有されていた主題であることを示すために、Zimmerman の著作から受けた影響の可能性を論ずるくだりと、キーツが『エンディミオン』を擱筆した Burford Bridge の Box Hill 周辺に横溢していた、隠遁者の気分をいざなう文化風土にかかわる分析である。鈴木氏が掘り起こしたこの二つの説は、これまでのキーツ研究において言及されたことはなく、おそらくは新発見の学説ともいえる貴重なものである。

スイス人の医師 John G. Zimmerman の主著 *Über die Einsamkeit* (1756) の翻訳である *Solitude Considered* (1791) は、官能を刺激する都会を離れて田園に隠棲することを称揚し、孤独の情緒と倫理性を追求するものであり、出版直後から版を重ね、多くの文人から称賛を集めた書物である。この文献は欧米の研究者のあいだでもほとんど知られていないものであり、キーツが実際に読んでいたか否かも現在のところ判然としていないが、鈴木氏の指摘にあるように、キーツの詩想の深化に多大な影響を及ぼした批評家 William Hazlitt や、友人の Charles Lamb もジーマーマンに言及しているのであれば、キーツも読んでいた可能性は非常に高い。しかも、この著作にある情操教育的な議論と隠遁生活への多様な論及は、『エンディミオン』の主人公とキーツ自身の精神的成長のありようを雄弁に物語るものと解釈される。とりわけ物語終結部の孤独に対する情緒は、ジーマーマンの

唱える孤独の利点と照応するところが大きい。

また、ボックス・ヒル周辺の隠遁的雰囲気については、鈴木氏は当時の旅行案内書や紀行文までも丁寧に調べあげているばかりでなく、自身も 2005 年に同地に滞在して実地見分をおこなっている。そこで判明したことは、この地がたしかに隠者文化を育むにふさわしい風景と雰囲気に包まれており、日記作者 John Evelyn や小説家 Defoe の賛辞を集めてロンドン人の楽園とされていたという事実と、さらに 1817 年秋にキーツが滞在した頃に実在した Mr. Reeves なる「珍妙な美意識と奇想の持ち主」が結んだ草庵 The Grove を、キーツが見聞していたことの高い可能性である。すなわち、同地に滞在したおりに書かれた書簡から窺われるキーツの隠者的気分は、これらの発見の内容に見事に照応するのである。

このような分析を通じ、鈴木氏は『エンディミオン』終結部における主人公と月姫シンシアとの融和を、詩神の寵愛を受けた隠者的詩人の誕生として読むことが可能であると結論づけるが、これは十分に説得力のある論述である。さらに、隠遁文化の受容というテーマが ‘Ode to Psyche’ や、ソネット ‘Bright star’ などの代表作へと引き継がれていくというくだりにも首肯させられるし、これが孤独 (solitude) のテーマと結びついて思索 (think) することの重要性をキーツが認識することになるという論述にも説得力がある。英文学における崇高の理念を体現する叙事詩の最高峰 Milton の *Paradise Lost* の精読がキーツ自身のアイデンティティ形成に寄与したことは広く知られているが、彼はミルトンの中に自身の性向や潜在的可能性を見出しており、たとえば混沌の中で絶え間ない元素の衝突により新たな秩序が生み出されるという作中の思考から、‘Ode on Melancholy’ などに見られる撞着融合的感性の源泉をミルトンに求めた論述にも無理がない。また、鈴木氏が 18 世紀の庭園文化における Milton の受容と隠遁文化を関連づけて解釈する議論は興味深く、それをまた「サイキに寄せるオード」の解釈に結びつける箇所も、じゅうぶん納得がいく論述となっている。

思索と隠遁文学との関連についてさらに言えば、同時代の先輩詩人ワーズワスの存在と影響を論じなければならないが、鈴木氏はここでも用意周到に論考を巡らせている。とりわけ *The Excursion* (1814) の序文に付された趣意書の文言や、湖水地方で妻や妹らの愛と友情に恵まれたワーズワスの隠遁生活が、そのまま彼の思索の牽引力となっているという指摘には得心がいく。しかしながら、豊かな自然を私的な思いに結びつけて詩を書くワーズワスの尊大さや、学問的な知識の吸収に消極的な姿勢は、キーツにとって受け入れが

たいものであったという、単純化された指摘はどうであろうか。出版こそされてはいなかったものの、『逍遙』に先立って書かれていた *The Prelude* で描かれているワーズワスの青年時代は、学問的知識吸収とその放棄に至るまでの激しい葛藤の軌跡であり、その軌跡を『逍遙』にも読み込むこと可能ではなかろうか。それでも、1818年夏の友人 Brown と敢行した徒歩旅行のおり、湖水地方で遭遇した国政選挙の泥仕合にワーズワスが介入していた事実は、たしかに、彼の心中に描かれていた孤高の隠遁生活を唱導する大詩人像を崩壊させるに十分な衝撃となったであろう。

ワーズワスの自伝的長編詩である『序曲』(1805, 1850) は、一般的にはロマン派の時代に特有の「私的な叙事詩」(personal epic) と解される。先行する叙事詩『失樂園』において、失楽したアダムとイヴがみずからの力で楽園を再構築すべく神の与えた楽園を去ったその後を受けて、『序曲』における楽園再構築の試みは始まる。ミルトンに具体化された叙事詩の伝統は内在化された楽園追求という私的叙事詩の構築によりワーズワスに受け継がれたわけだが、政治活動はいかにも彼の唱導する隠遁生活にはそぐわず、ワーズワスにははたして人間の心に殉教するような叙事詩的熱情があったのか、とキーツの嘆きを呼ぶことになる。かくしてキーツはふたたびミルトンの叙事詩の伝統の吟味を促されることになった。

おもに第三節でなされた詩行の解釈に関してひとこと言えば、やや書簡にへばりつき過ぎの感が否めないのは残念である。鈴木氏が書簡を丹念に正確に読み込んでいる点は充分んに理解できるが、書かれた時期も異なり、論旨もそれぞれ異なる書簡での言葉を絶えず作品と相互補完的に捉えることは、あたかも作品解釈の最終的な判断者を作者自身に委ね、作品の妥当性を作者自身の発言によって証明するようなものである。すなわち、それは作品の書かれた内的必然性のある程度は説明するものであっても、作品世界の価値評価の妥当性を証明するものではない。作品は書簡を指針として生み出されたものではないからである。

第二章：この章では、ワーテルローの戦い後の政治背景と、その中に見え隠れしていた千年至福（王国）説（millenarianism）が「ハイピリアン」の構想にどの程度の影響を与えたのかが考察される。鍵は、第三巻において、新しい太陽神アポロがハイピリアンから神権を移譲される契機となる「膨大な知識」（Knowledge enormous）の獲得を、どのように解釈するかにある。

一体に、ロマン派詩人は終末論を意識の次元において起こる内的革命と読み替えたが、外界で生じうる大変革の可能性を千年至福説的な思考の枠組みの中で追求することはなかったのだろうか。鈴木氏はここで 1810 年代に話題となった千年至福説とかかわりの深い幾人かの人物と、かれらの言説に対するキーツおよびコックニー詩派の反応を検証し、二つの「ハイピリアン」を終末論を中心主題とした、千年至福的な社会を追求する物語として解説する。

ここに登場する人物のうち、最初のひとは第一節で扱われる Joanna Southcott であり、次は第二節で扱われる Robert Owen である。

サウスコットは歴史の表面にはほとんど出ることのない狂女で、千年王国の到来を予言して寄付金と信者を集め、偏狭な信仰を説いていた。みずからを黙示録に預言されたメシアの再臨となる子 Shiloh を産む者と公言していたが、果たせず、失意のうちに生涯を終えた狂信者である。キーツ自身も彼女を世に現れては消えていく社会の厄介者とみなしていたが、鈴木氏がここで彼女を取り上げたのは、サウスコットの信仰がワーズワスに代表される湖畔派詩人の保守思想と類縁関係にあったと考えるからである。すなわち、「ハイピリアンの没落」冒頭の詩神への祈願で、キーツは詩人と狂信者を識別しようとするが、彼の自覚する使命とは、先の世代の詩人たちが経験した政治的熱狂と失意、そしてそれに起因する自己閉塞的な世界への沈潜という現象を克服し、万民の救済の可能性を探ることにあったと思われる。

ただ、歴史からあらためて掘り起こした話題であるとはいえ、一時的な社会現象にとどまった狂女の言動を、社会的に認知されて一定の影響力を保った詩人たちの活動と類比させることに、はたしてどれほどの意味があるのか。千年至福説にかかわる記述や具体的な関心そのものを窺わせる表現がキーツの書簡に見当たらないことに加えて、この点も審査員から肯定の声を聞くことはできなかった。フランス革命が世俗版の最後の審判とみなされていたこととの兼ね合いで、千年至福説も 18 世紀末から民衆のあいだで盛んに唱えられるようになった言説であり、当時の代表的評論誌である *The Edinburgh Review* でも長編の評論が度々掲載されていたように、論述自体はたしかに興味をそそる。ただし、あえてこの論述の枠組みを用いる必要性があったのか否か、この点は若干の疑問を抱かざるをえない。

このような状況下にあって、第二節で扱われる Robert Owen もまた千年王国の到来を講演や著作で巧みに利用しながら、民衆のメシア待望に応えようとしていた。彼はしばし

ば空想的な社会主義者と呼ばれてはいたものの、スコットランドの New Lanark 紡績工場
で宗教性を排した実物教育により、福祉計画の成果をあげて社会的な注目を集め、多くの
見学者まで招来していた。ハントやハズリットとも交流があったが、後者は彼を夢想家の
範疇に入れていた。ただしハズリットは彼の夢を ‘practical’ と捉え、コールリッジのよ
うな非実用的哲学の対蹠点に位置づけていた。他方、ハントは『エグザミナー』の社説で、
宗教性を排した彼の社会理論を好意的に取りあげるなど、その主張の普及に協力すること
になった。一見、叙事詩的熱情との関連は薄いかの様に思われる夢想家にかかわるこのよ
うな定義は、やがて「ハイピリアンの没落」において「真の詩人」と「夢想家」の識別と
定義に関する重要な役割を担う伏線となるのである。

続く第三節では、「ハイピリアン」における神話的事実の借用や変更が、当時の政治的状
況を包摂した形を取っている可能性が探られる。すなわち、ハズリットも批判した神聖同
盟後の絶対王制を懐古する保守派の思想傾向との類縁関係が、そこに認められることにな
るのである。また、第四節は、ハントが 1819 年の『エグザミナー』の年頭所感記事に盛
り込んだ社会情勢の分析から説き起こし、「ハイピリアン」の筋書きが考察される。ここで
「ハイピリアン」との関連で重要な鍵を握るのは「知識」であるが、ハントは終戦後四年
目に入る当時の社会状況を、ミルトンの「キリスト生誕のオード」における平和の訪れに
比肩するものとみなしている。

すなわち、万民に救済をもたらせるキリストが生まれた朝に先駆けて横溢していた「平
和」を、ハントは「万民の利益という壮大な感覚」を生み出す「知識」の普及にたとえる
のである。そして、このような知識を広くあまねく民衆に伝播することを可能にし、専制
政治を排して千年王国の招来を促すものが出版物であるとハントは定義づける。その論を
支えていたのは、安価な定期行物やパンフレットの流布により民衆の政治的、宗教的意
識の啓発が進んでいた社会であったことは疑いがない。鈴木氏の見解によれば、出版物に
対するこのような社会状況は、キーツの叙事詩創作の観点からすれば、知識によってアポ
ロ自身に神格を自覚させる記憶の女神 Mnemosyne の性格設定に相当するものであった。
そして、次の五節で取り上げられる Richard Carlile の出版事業も、キーツの創作に関わ
りをもつ。投獄と出獄を繰り返していたこの急進的ジャーナリスト・出版者もまた、ナポ
レオン戦争後の世界を象徴するかのよう出版物の革命的威力を肯定的に主張した人物で
あり、アポロ神誕生の布石にもなりうる存在であった。これに加えて、六節で論じられる
スペンサーの *Faerie Queene* の続編としてキーツが生前最後に書いたとされるスタンザ

で、**Typographus** (=印刷された言葉) によって文学的・哲学的教育を受けた巨人が宿敵(=体制)に仕返しをする様子が意味するところも、知識の伝播力によって民衆が究極の自由と平等を勝ち得る寓意と解釈される。

五節、六節は審査員からの指摘もあったが、かなり論旨が入り組んでおり、しばしば論述が迷路に入るようなところがあるように思われるかもしれない。しかし、突き詰めて言えば、これらは鈴木氏が独自の語り口によって、千年王国という民主社会を招来させる道筋を説くものとして「ハイピリアン」の意味を敷衍するものであろう。そのような民主社会の到来を可能にするのが、タイタン神族が象徴する蒙昧の専制君主体制を崩壊させたオリンポス神族であり、かれらの象徴するところは啓蒙された民衆なのである。そして、その民主社会到来の契機となるのが、膨大な知識の獲得により神格を得たアポロ神の誕生であると解釈される。

第三章：この章では「ハイピリアン」改作の狙いが、二つの断章とオード群を通して検証されるが、そこで注目されるのが作品における語りの形態と詩想との関係である。ここで鈴木氏はミルトン風の叙事詩をめざした「ハイピリアン」放擲の理由を、独創性の問題として捉える。すなわち、ホメロスを源流とするミルトン風の客観的な無私の語りでは、もはや独創的な詩を書くことは不可能と悟った詩人が、近代的な一人称の語りにその可能性を見出そうとして挑んだのが「ハイピリアンの没落」であった。そして、一人称の語りのモデルとしてキーツが比較の対象としたのが、先輩詩人のワーズワスであり、ダンテ(『神曲』)であった。ここで問題になるのは、キーツが自分自身を「遅れてやってきた」(belated)詩人であると、当惑気味に捉えていたことである。たしかに、彼の脳裏にはつねにこの意識がこびりついており、彼の創作はある意味でこの意識の重圧から解放された新しい詩人像を目指したものであったということも可能であろう。

しかし、ここにもうひとつの問題が潜む。「ハイピリアン」の語りはたしかにワーズワスのような近代詩人の主観主義的傾向との間に一線を画するものだったが、「ハイピリアンの没落」はダンテ風の一人称の語りという形態を取りながらも、なおかつ主観主義を排するという難事と対面しなければならなかった。詩人が作品の副題としてつけた“A Dream”という言葉は、自己客体化という枠組みの中でその意図を完遂しようとする意図をよく物語る。鈴木氏は、とりわけワーズワスの一人称の語りとの差を吟味しながら「没落」に込められた詩人の意図を検証することになる。

詩神の客観的な語りによって神話世界の一大事変が扱われた「ハイピリアン」は、同時にキーツ自身の内面的成長が昇華された自己創造の物語であった。ここで鈴木氏の論述の道案内をするのが、批評家 Hazlitt の名著 *An Essay on the Principles of Human Action* (1805) で展開された想像力論である。オリンポス神族との戦いに敗れたタイタン神族の主神サターンは、没落の理由と自己のアイデンティティ喪失の真義を把握することができず、ひたすら栄光に包まれた過去の幻影を追い求めて、地の底で呻吟する。すなわち、主神は現在の自己を未来の自己に投擲する想像力を欠いているため、自身とその眷族タイタン神族の分身として現在するジュピターとオリンポス神族が、じつは自身と眷族の未来像に他ならないことが理解できずにいるのである。

換言すれば、古い自己を喪失する悲哀が新しい自己の誕生する歓喜によって超克されるべきことが、ここで予示されている。そして、この知識の獲得により、新旧の自己は和解を遂げなければならないのである。それは樂園喪失神話の弁証法的解釈であり、ハズリットの想像力論にある想像力の高次の営みとは、煎じつめればこの方向を示しているであろう。作品に即して言えば、状況打開の道を探ろうとするハイピリアンの冷静さと、アポロに見られる知識の渴仰は、人間精神に秘められた自己実現の可能性とその方法を示すものと考えられる。そして、作品の第二巻で海神オケアヌスが説く「美において勝る者が、力において勝る」という新旧交代の原理は、第三巻で世界の「膨大な知識」を得て神権を得たアポロ像の誕生によって、美と知の融合という結実をみる。キーツの言葉を借りて言えば、アポロ像は詩人の「理知への大望と美なるものを一つに結び合わせようと切に求める熱情」の象徴である、と鈴木氏は考えるが、この見解には一理ある。

第二節以下の論述は 1819 年の春に書かれたオード群から、主として ‘Ode to Psyche’ ‘Ode to a Nightingale’ ‘Ode on a Grecian Urn’ という珠玉の作品が考察される。これらの作品群は、全体として詩人自身の発展の重要局面をあらわす自伝的作品であると考えられる。しかも、これらの作品の執筆時期は、二つの「ハイピリアン」に挟まれる形になっているため、鈴木氏はこの考察を最終的にはキーツの二つ目の叙事詩の起源とその発展の分析に適用するためにおこなっている。ここで考察されるべき問題は、キーツがピンダロス風オードのように本来が公的な性格をもつオードを主観的に扱ったり、客観的性格であるべき叙事詩を主観的に扱って私的叙事詩を創作することが、崇高な過去の作品に対する賛美からの逸脱なのか、あるいは、キーツの手法はどのような点において近代詩人の手法とは異なる形で独自性を生み出すのか、ということである。これらの分析は、具体的にはキ

ーツの詩作と詩人としてのアイデンティティ確立に積極的、消極的な影響を及ぼしたワーズワスに対する批判とその受容が鍵となるが、このあたりの議論は術語の定義とその使用にしばしば正確さを欠くため（例：privatisation, subjectification, internalisation など）、明晰さが翳ることがあるのは残念である。

「小夜啼鳥に寄せるオード」を例にとって紹介する。このオードの詩的手法はキーツの批判した近代詩人と同じ独創性の理論に依拠しているが、実は近代詩人批判が潜むと鈴木氏は見る。このオードでは、鳥は超歴史的象徴として語り手の心に自由活動を促す機能として存在し、語り手の意識を混濁した白日夢に退行させることなく、人間性の不可避的な限界に対峙させることになる。ワーズワスのように詩の構成要素に個人的な歴史（伝記）を奔流させようとする意識に、キーツは歯止めをかける。すなわち、近代詩人の手法的特徴である過去をみずからの慣れ親しんだ伝記的回想とするのではなく、個別で特殊な状況を抽象し、普遍的（transhistorical）で表象的（representative）な表現で詩を構築する方向を取るのである。読者は対象を描く作者の中に自身の分身を観るのではなく、描かれる対象自体に自身を観る、あるいは対象に同化するということである。この手法はかつて詩人がシェイクスピアに認めた「消極受容能力」（negative capability）の機能の具体化と考えられよう。

また、鈴木氏は「ギリシア古甕に関するオード」を、ハズリットのイギリス詩人講義録の初回で展開された詩論の視点から、物語探究の記録として読み、古代人との差が鋭く意識された語りに、古代ギリシアの美の宗教に対する詩人の懐疑が胚胎していることを指摘する。鈴木氏は、オードの語り手がレリーフの像（絵画、じつは彫刻）を時間とともに推移する一連の出来事として物語（詩）に翻訳しようとする試みを失敗と考え、最終連で甕が発する警句（“Beauty is truth, truth beauty,”—that is all / Ye know on earth, and all ye need to know.）にはこの失敗が反映されて、自己充足的で独善的な調子を帯びると考える。

たしかに、悲哀（不快）を排して美（快）のみを人間が知るべき真とする古甕の警句は、鈴木氏の言うとおり近代人には近視眼的と映り、そのような知覚に満足することはできないかもしれない。しかし、それでもキーツという詩人は非在のものに対する願望を排除することはなく、むしろ非在のものを可能性として受容する詩人ではないか。有限性という人間の不可避の属性にこそ豊かさを想像するキーツの詩想を考えれば、必ずしも否定的な結論を導く必要はないかもしれない。「ハイピリアンの没落」の展開を、物語探究の失敗と

する意識の延長上で考察する都合はあったにせよ、創造的衝動と倫理的意思の葛藤により生み出される絶え間ない創造と破壊というアイロニカルな緊張感の上にこそ、この詩人の創作の原理があるのではないか。

「ハイピリアンの没落」の物語自体は、その一人称の語りにおいて、ミルトンの主題と詩神の語りが自然化、人間化されたワーズワスの『逍遙』の近代的アプローチに倣ったものと見ることが可能である。神殿の巫女 **Moneta** は「ハイピリアン」の記憶の女神ムネモシュネーに相当する。すなわち、彼女は『逍遙』における **Wanderer** のように物語を記憶する者であり、また混交主義的な様式のサターンの神殿とその中で展開される語り手の試練は、人生における人間精神の発展形態をたとえた「人生多室説」の思考回路の写し絵となる。いうまでもなく、それは多室の館における無思想の部屋から処女思想の部屋への移行と、暗い通廊を抜けた先にあるはずの和解の部屋への到達可能性という考え方である。そして、そこには啓蒙思想の影響や、人間の自立性を重んじる自由主義的な倫理観が反映されていると鈴木氏を見るが、じつはこの視点こそが、本論文の最終章で重要な意味をもつことになるのである。

モニータの脳内に移植されたハイピリアンの物語は古甕のオードにおける物語探究を引き継ぎ、モニータの表情にあらわれた悲しみの美の可能性が物語の形を取って追求されると同時に、物語そのものがキーツの詩論表明の場として機能することになる。ミルトンが『失樂園』においてなした神の摂理の擁護を、ワーズワスは『逍遙』において人間化して彷徨者の語りとして提示するが、「ハイピリアンの没落」において提示される物語の構造は、いわば『失樂園』の大天使ミカエルがアダムに示したヴィジョンと、『神曲』のダンテとウェルギリウスの地獄巡礼を融合させたものとなる。ワーズワスの口承的な物語の伝達方法は語り手の人格を際立たせるが、一方、寡黙なモニータの語り（ヴィジョン）は、雄弁な彷徨者や教条的な牧師とは対照的に、聞き手としての幻視者（すなわち、語り手）に自立した知性の覚醒を促す。幻視者は百合よりも白い巫女の表情を「神が見るように」みつめることにより、その表情を生み出す彼女の脳髓の活動に限りなく壮大な知識を読みとるのである。鈴木氏はこれを、個性と個々の精神活動に対するキーツの敬意のあらわれと見るが、この手法によりキーツはたしかに独自の叙事詩の形態と声域を獲得したとするような解釈は、キーツ研究に新たな指標を築いたものと考えられよう。

第四章：二つの断章「ハイピリアン」の重要概念のひとつは知識の獲得であった。作品の

内容に即して言えば、それは女神や巫女の表情に知識を読み込むという、読書体験にもたとえられる行為であったが、いずれの断章もその象徴的な読書体験の場面をもって放擲されていた。いずれの断章においても詩による知識の伝播、あるいは詩作品そのものを知識交流の場とする意図があらわされていた。このことにかんがみて、本章においては読書を巡る 19 世紀初頭の教育事情と政治状況が検証され、この歴史的な文脈の中でワーズワスの『逍遙』の後半部とキーツの実質的な創作活動の掉尾を飾るオード *‘To Autumn’* の位置づけがなされる。とりわけ、「秋に寄せる」は、90 年代以降、特定の政治的な意味を読み込まずには済ませられないような捉え方が主流となっているが、鈴木氏の解釈はさらに広い文化的枠組みの中で作品を論ずるものである。すなわち、作品を生み出した詩想がワーズワスの作品に見られる個と社会の断絶という主題から出発していたことと、私情を排した秋の描写が民主主義の台頭と連動しており、叙事詩の大団円となる預言的ヴィジョンであることが論証されるのである。

詩人の作品は読者の生に繰り返し形成的に働きかけることにより、迫真性を生み出す。そして、『エンディミオン』で誕生の様子が描かれた隠遁詩人、すなわち、自己省察により存在の新しい秩序を予見する隠遁詩人は、形成的な働きかけから生じる社会との絆を通して社会に影響を及ぼすことが可能となる。その前提として、社会には形成的な働きかけを受け止める読者層がなければならないが、18 世紀後半からのジャーナリズムの隆盛と急激な人口増にともない、この社会には中産階級ばかりでなく労働者階級にも多くの読者が誕生し始めていた。この読者層の内実について、鈴木氏は本章の第一節で、まず労働者階級の子弟に識字教育を施して読書の普及に貢献した学校教育の理念を調べ、「湖畔詩人」とキーツ周辺の人びとの大衆教育を巡る政治的発言の背景を明らかにする。

その過程で、19 世紀に躍進を遂げた教育施設として日曜学校 (Sunday school) と通学学校 (day school) に関して、その教育理念とともに活動の実態が検証される。とりわけ重要なのは、大衆教育の普及を可能にした Joseph Lancaster と Andrew Bell の教授法である。ランカスターが非国教徒の支持を得た助教法 (monitorial system) に基づく学校をロンドンに開校 (1798) する一方で、ベルは国教会の支持を得た助教法 (Madras system) をインドで開発し、帰国後 (1811) に貧民教育国民教会を組織し、やがて双方ともに宗派の垣根を越えて初等教育の普及に裨益することになる。いわゆるマス・プロ教育の始まりであったが、教育人口を飛躍的に伸ばし識字率を高めたという点において、この話題は本論の組み立ての中で重要な位置を占めるものである。

ただし、効率を重んじるあまり読書の内容まで制限するような、保守反動的で一元化されたマス・プロの国民教育は、産業社会の中でひたすら生産性の向上に寄与する人間や、軍隊において規律・統制に唯々として従うような人間を一律に育成するための、好都合な方法ともなりえた。これが再び独裁政治を招来して、人間の精神と自由を脅かすような恐れもまた危惧されていた。読書が社会的、政治的イデオロギーに潤色されることへの危惧である。その結果、読者層の拡大は、詩人たちに自己の著作をどのような読者層に向けるのかという問題を突きつけることになった。おおむね終戦後のワーズワスや Coleridge のようなロマン派の第一世代はそれぞれ、労働者階級ではなくより上の「選ばれた読者層」に狙いを定めており、これが第二世代のキーツやハズリットなどからの批判を呼ぶことになる。しかしがら、とくにキーツは、自身の作品が「選ばれた読者層」というまでもなく、一般大衆からの不評をも買っていたことから、じつは一般大衆に対しては侮蔑の気持ちを抱くという、矛盾も抱えていた。そのために、彼は一層、読者の想像力を活性化するような作品を目指すことになるが、じつはこれこそ彼の創造的想像力が本質的には啓蒙的であると考えられるゆえんである。

次に、鈴木氏は『逍遙』第五巻以降に見られる社会思想や教育にまつわる言説や表象に着目し、そこにコックニー詩派が批判した「ワーズワスの崇高」の例となるような、個と社会の断絶と見られる状況が生じていることを確認する。すなわち、ワーズワスの精神の崇高さとは民衆に対して選別的に働くものであり、キーツの考える民主的な方向を目指すものではないことが指摘される。作品に即して言えば、朝方の出発の場面から始まり夕闇の別れの場面で終わる作品の後半部は、孤独者によって突きつけられた問題をはらむ。それは、彷徨者のように「秋の恵み」を享受することが田園の貧しい村人らには可能であるのだろうか、という問題である。典型的な例が、最終巻の後半部で一同が湖畔で目にする「崇高な統一」と呼ばれる夕焼けの光景が、選ばれし者だけに楽園回復がなされるという終末論的ヴィジョンと解される。このような特権的な崇高が、はたして真の崇高となりうるのだろうか。キーツが同様の夕焼けを描いた「秋に寄せる」で示すヴィジョンは、まさにワーズワスの崇高を反転させたものであると解釈されるが、この解釈は重厚な本博士論文のまさに掉尾を飾るというにふさわしい、新たな発見に満ちた論考となっている。審査員が一樣に称賛の声を寄せたことも不思議はない。

鈴木氏も指摘するように、現在、主流となっているこの詩の解釈には、詩人が特定の政治問題に対して抱く積極的関心を読むか、逆に、政治・社会論争からの逃避の姿勢を読む

か、といういわば限定的な読み方である。これらも含めてさまざまな先行研究を踏まえて十分に咀嚼したうえで、鈴木氏はさらに広範で「崇高な」解釈の可能性を示す。それは、この詩の根底にある詩想が 1818 年 2 月 19 日付の書簡で「勤勉なる怠惰」と形容された“voyage of conception”（観念の旅）という甘美な体験に根差しているとする解釈である。書簡の多少の読み違いはあるものの、鈴木氏の論点はずるところ、個の成長と社会の発展における書物と思索の意義が、「大いなる民主社会」の誕生を促すところにあることをキーツが見抜いていた、というところにある。すなわち、書簡では、読書と思索は多様な人間が多様な方向を辿りながらも最終的には同じ地点に到る旅路にたとえられるが、そこで構築される社会はオークや松の大木を遠景に配した茨やハリエニシダの生い茂る荒野ではなく、それぞれに特色のある樹木群によって構成される大いなる森という民主社会なのである。

「秋に寄せる」で描かれるさまざまな秋の様子には、ワーズワス的な崇高とは対照的な社会の豊かさが暗示されている。とりわけ第三連では、種々の個性的な声から編成された秋の「音楽」が、偉大な民主社会のヴィジョンとして提示される。このヴィジョンがあらわしているのは、究極的には詩が引き出しうる人間社会の豊かさである。そして、そのような多音声の音楽の開始を合図した夕映えを詩神アポロの象徴と見るのならば、時の推移により生滅流転する存在の悲哀と苦悩は詩歌に崇高な可能性をもたらすものと受容され、ハイピリアンとアポロの和解が成立したと理解することもできよう。多様性と統一の理念に基づくこのヴィジョンは、ワーズワスの終末論的で選別的なヴィジョンに比べ、多様性に重きが置かれていることは言うまでもない。

さらに、『逍遙』の夕焼けの場面を「秋に寄せる」との関連で重要性を指摘しているのは、おそらく鈴木氏が初めてであろうが、この考察は第四章の中でも最大級の価値をもっていると思われる。『逍遙』の日没の場面では、光が太陽という一点の光源から空一面に発せられているのに対し、「秋に寄せる」においては、光に染まる雲の方があたかも光源のように描かれており、上方から下方まで全体が照らされていることに鈴木氏が気づかなかったのは残念である。この点まで考慮に入れると、「秋に寄せる」第三連の日没がさまざまな意味で『逍遙』の日没場面の反転となっていることがさらに明確に立証され、この部分が、いや、この詩自体がワーズワスを強烈に意識して書かれたものとして読むことが可能となるのである。この意味においても、『逍遙』の日没場面を「秋に寄せる」との関連で考察したことの意義は大であるし、また、オードにおける多様性、多音声を大いなる民主社会到来

の予兆として捉えたことも、ロマン派作品の新たな解釈に裨益するところ大であろうと思われる。時あたかも奴隷貿易の廃止を受けて、審査律や自治体法の廃止、カトリック解放令、第一次選挙法改正等々、いまだ平坦な道のりではないものの、民主社会の招来へ向けて社会が大きく動き始める前夜であった。

総評：昨今の英米における英文学研究が急速に文化研究などに傾斜し、文学作品の芸術的価値や作品を生み出した作家の魂の軌跡を軽んずるかのごとき風潮があることは、きわめて嘆かわしい。それはひとえに文学作品によって感動させられるという原体験が欠如しているからにほかなるまい。このような状況下にあって、叙上のごとく、鈴木氏はまさに作品から受けた感動を胸中深くに収め、作品と作者に対する深い共感と、テキストの正確な理解と批判を学問の基盤に据えて、なお早稲田大学ロマン派文学研究の伝統である実証的な研究に徹し、本論文の執筆にあたってきた。本大学の誇る定期刊行物のコレクションを有効に活用したことも含め、書簡や膨大な傍証史料、また研究書等をまさに自家薬籠中の物とするかのごとく、縦横に使いこなした手腕は特筆に値するし、多くの論題に対する目配りの良さと立論の妥当性などは、欧米の研究者の著作に十分に比肩しうるものである。ただし、欠点がないわけではない。とくに、三篇のオードを扱った第三章後半部は、論述が交錯しておりさらなる整理が必要であろうし、第一章で立論した隠遁者詩人の扱いが最終章でいまだ少し明確に結論されていないことには不満が残る。しかし、もとよりこれらの瑕瑾は他日の検証に委ねられるべきものであり、多くの貴重な発見や新説の提唱を含む本論文の真価を損なうものではない。以上のことを総合的に判断して、本論文が早稲田大学博士（学術）の学位授与に十分に値するものであることを、ここに報告する。

以上